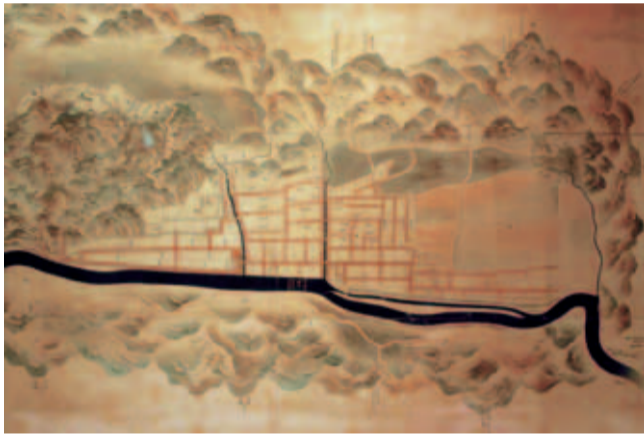


備中高粱

城下町散策絵図

鎌倉時代から続く歴史と伝統の備中松山城下の町並み



備中松山城絵図(江戸時代前期 国立公文書館内閣文庫蔵)

城下町高粱の歴史

高粱は備中松山城の城下町として、また備中国の中心地として栄えました。

この地は山陰と山陽を結び、東西の主要街道も交差する要地であるため、戦国時代には激しい争奪戦が繰り返されました。

安土桃山時代、備中国は安芸の毛利氏と備前の宇喜多氏に高粱川を境に分割支配されていましたが、関ヶ原の戦いの後、両氏が備中から退き、備中国奉行として小堀氏が支配してから本格的な城下町建設が始まります。

小堀氏により商家町の本町、新町が元和2年(1616)に建設、次の池田氏により商家町の下町、職人町の鍛冶町が元和4年(1618)に建設され、周辺の武家町も整備されました。

この基盤を受け継いだ水谷氏三代の時代には、新田開発や高瀬舟の整備などにより経済的な発展を遂げ、寛文10年(1670)には南町、さらに貞享3年(1686)に東町ができ、「松山六ヶ町」が完成され、備中松山の城下町が成立しました。また、水谷氏は備中松山城の大修築を行い天守を完成させました。

以後、この時代の町割りや地割り、町名や小路が現在まで色濃く残されています。

延享元年(1744)から幕末まで板倉家が七代にわたって治めますが、幕末には藩の財政が厳しくなり、板倉勝静は元締役として山田方谷を登用。方谷は10万両の負債を10万両の蓄財に変えたといわれ、藩の財政を見事に立て直します。勝静は、幕府老中首座として將軍徳川慶喜を補佐して幕政に当たりました。優秀な漢学者であった方谷は明治以後、教育に専念し、方谷の元から三島中洲、川田澁江など多くの人材が輩出されました。

明治12年(1879)ごろ、キリスト教が初めて伝わり、その後、高粱基督教会が設立され高粱の近代化に大きく影響を与えました。このころ同志社英学校を創立した新島襄の教えを受けて県内初の女学校・順正女学校を創立した福西志計子や、非行少年の更生に生涯を懸けた留岡幸助などが活躍しました。



備中松山城

高粱の町家の特徴

高粱の町家の形態は、間口が狭く奥行の長い短冊形の敷地に建ち、その敷地の道路側に主屋が設けられ、その背後に炊事場・風呂・便所・土蔵などの付属屋が連なっていく形式です。主屋は平入りで、特別なものを除き切妻の大屋根が掛けられています。一般的には一階前面には庇が取り付けますが、高粱の場合、庇の下に下屋を設けず、一階前面と二階前面が同一の通りとなります。この形式は、京都の町家に多く見られますが、岡山周辺では高粱のほかには同じ高粱川流域の玉島で見られるだけの珍しい形式で、これは高粱の町家の大きな特徴となっています。

町家の細部意匠



■虫籠窓(むしごまど)

本来は、厨子二階などで屋根裏の換気のための通風口だったものが、装飾化されたものです。座敷化されていない二階の壁面に多く見られます。



■格子(こうし)

古くは「隔子」とも書き、屋内と外界とを隔てると同時に結び付ける機能を持っています。高粱の町家の中には平格子と出格子を持つ町家が多くあります。



■絵様持ち送り(えようもちおくり)

柱から外に突出した部分を受ける支え板のことで、高粱では社寺風のものから見たもので見ることが出来ます。



■なまこ壁(なまこかべ)

壁面の保護のための漆喰で塗り込めたもので、漆喰の塗り方によってさまざまな意匠があります。「松葉」「七宝」など変化に富んだ美しい例が見られます。



■板暖簾(いたのれん)

底の下に吊り下げられた帯状の板。もとは商業を営む町家の前面がすり抜け戸で開放されていたころ、曝射しを防ぐ目的で付けられたものといわれています。



■袖壁(そでかべ)

伝統的な町家建築では、一般的に見られるもので、高粱でも見受けられます。袖壁の存在によって、各戸は独立性を高め、二階壁面に抑壁が現れます。

四季の行事

- 4月第1土・日曜日 備中たかはし町家通りの籠まつり
- 4月29日 八重瀬神社祭礼
- 6月15・16日 七恵比寿祭り
- 8月14・15・16日 備中たかはし松山踊り
- 10月第2日曜日 御前神社・八幡神社 秋季大祭(神輿の巡幸)

備中たかはし町家通りの籠まつり
備中たかはし松山踊り
八幡神社の神輿巡幸
御前神社・八幡神社 秋季大祭(神輿の巡幸)

高粱の武家屋敷

城下町高粱では、伊賀谷川(紺屋川)以北の「城内」が家者・年寄役を筆頭に上・中級の武士が居住する地域で、以南の「城外」は中・下級の武士の居住した場所。武家町は町人を囲むように配され、住人の保護と治安の維持を図っていました。現在でも門構えや石垣・土塀などは数多く残っています。

武家屋敷は間口の大きな敷地に、前庭を少し下がった所に主屋が建ち、敷地の周囲には土塀が回り、道路に面して屋敷の入口には長屋門・櫓木門などの門構えを持っています。

土塀の基礎には石垣が用いられ、上部には瓦葺きの「屋根」が載せられています。長屋門は、門の両側に居室を備えたもので、通り面にして武者登りと呼ばれる見渡りのための格子窓が設けられています。櫓木門は、ほぼ一間間隔で建てられた二本の柱から櫓木を出し、出桁としてその上に屋根を載せたもので、これらの種類は家格により違いがあります。主屋はそのほとんどの平屋建てで、入母屋根の四方に下屋が葺き下ろされています。平面は、いずれも一方の片側を表から奥まで通じる土間とし、反対側が居室部分となっていています。

年	代	城主	家紋
1240	鎌倉時代	秋庭重村	信村
1300頃	室町時代	高橋宗康	重継
1350	室町時代	高橋重明	重明
1362	室町時代	秋庭重明	重明
1509頃	安土桃山時代	上野頼久	頼久
1521	安土桃山時代	高橋宗康	重継
1533	安土桃山時代	高橋宗康	重継
1553	安土桃山時代	高橋宗康	重継
1561	安土桃山時代	三村家親	家親
1567	安土桃山時代	庄元親	元親
1571	安土桃山時代	三村元親	元親
1574	安土桃山時代	備中兵乱	備中兵乱
1608頃	徳川時代	毛利輝元	三村氏(丸に藤丸方勝)
1600	徳川時代	毛利輝元	三村氏(丸に藤丸方勝)
1617	徳川時代	池田長幸	池田氏(花輪)
1632	徳川時代	水谷勝隆	小堀氏(花輪)
1642	徳川時代	水谷勝隆	小堀氏(花輪)
1664	徳川時代	水谷勝隆	小堀氏(花輪)
1689	徳川時代	水谷勝隆	小堀氏(花輪)
1694	徳川時代	水谷勝隆	小堀氏(花輪)
1695	徳川時代	水谷勝隆	小堀氏(花輪)
1698	徳川時代	水谷勝隆	小堀氏(花輪)
1711	徳川時代	水谷勝隆	小堀氏(花輪)
1744	徳川時代	水谷勝隆	小堀氏(花輪)
1751	徳川時代	水谷勝隆	小堀氏(花輪)
1769	徳川時代	水谷勝隆	小堀氏(花輪)
1778	徳川時代	水谷勝隆	小堀氏(花輪)
1798	徳川時代	水谷勝隆	小堀氏(花輪)
1804	徳川時代	水谷勝隆	小堀氏(花輪)
1849	徳川時代	水谷勝隆	小堀氏(花輪)
1867	徳川時代	水谷勝隆	小堀氏(花輪)
1868	徳川時代	水谷勝隆	小堀氏(花輪)
1869	徳川時代	水谷勝隆	小堀氏(花輪)
1871	徳川時代	水谷勝隆	小堀氏(花輪)
1873	徳川時代	水谷勝隆	小堀氏(花輪)

高粱市

発行所 高粱市産業経済部まちづくり課
TEL.0866-21-0257 FAX.0866-22-9460
〒716-0062 岡山県高粱市笠原近所286-1
E-mail:machizukuri@city.takahashi.lg.jp

岡山自動車道笠原ICより国道484号線約15分
岡山自動車道有瀬ICより国道313号線約25分
JR岡山駅より備前線で備中高粱駅下車(各駅停車約50分・特急列車約35分)
岡山空港から車で約50分

「備中高梁城下町散策絵図」は、城下町高粱の歴史の町並みの魅力を多くのお客さまに知っていただくための地図に掲載している個人住宅は非公開です。町並み散策には住民のプライバシーに十分配慮していただくようお願いいたします。

また、高粱の町並みは木造住宅が密集しています。歩きながらのお客さまにはご注意ください。

発行所 高粱市産業経済部まちづくり課
TEL.0866-21-0257 FAX.0866-22-9460
〒716-0062 岡山県高粱市笠原近所286-1
E-mail:machizukuri@city.takahashi.lg.jp